

## 看取りについて 思うこと



函館市医師会  
函館おしま病院

福 徳 雅 章

「看取り」という言葉を辞書で引くと「病人のそばにいて世話をすること、死期まで見守り看病すること」等と書かれています。すなわち、看取りとは単に死に立ち会うということではなく、それまでどう関わってきたのか、ということに意味があり、それは「最期まで看取る」という言葉に凝縮されます。

私は医師になってから、担当患者が亡くなられた時は夜中であっても必ず出てきて、死亡確認はできなくても死亡診断書は書き、最後に病院からお見送りするまでを責任持ってやってきました。それは自分の中でこだわり、最近まで続けてきたことです。

4年前に新しく医師が入職した際、事務長から「夜には出てこないで欲しい」と言われました。「もし院長が出てくるなら、他の医師も同じようにやらなければならないと思えば負担になる」ということでした。“分かっちゃいるけど止められない”私でしたが、今回ばかりは決心し、以後は夜間・日祭日には原則として当直医に全てお願いすることとしました。最初はそれが逆にストレスだったりもしましたが、今は心身ともに負担が軽くなったことを実感しています。

遺族調査 (J-HOPE) に基づいた論文 (Shinjo T. ; Palliative Care Research 2010) によると、家族は主治医の死亡確認や臨終の立ち会いを望んではいるが、それができなくても心理的なつらさは強まることなく、臨終までに頻りに顔を出してくれていることで満足している、という結果でした。何かこれまでこのことにこだわっていた自分は何だったのか、と思う結果ですが、この仕事を長く続けていくうえで、自分自身を大切にすることも必要であると今さらながら痛感しています。

家族も最期の時に立ち会いたいという方が多いですが、2016年に発表されたJ-HOPE 3付帯研究では、臨終時に立ち会いを希望するもできなかったことはその後の家族の抑うつ状態や複雑性悲嘆に影響を及ぼさないが、患者が大切な人に伝えたいことを伝えられなかったことは後に影響を及ぼした、ということでした。すなわち、臨終時に立ち会うことの前に、それまでの患者と家族の互いのコミュニケーションを深める関わりこそが必要であるという結果でした。

先日、妻の父が他界しました。前日から容態が急変したにも関わらず、新型コロナ禍により義母ですら立ち会うこと叶わず、臨終後の面会となりました。通常でも死の瞬間に立ち会うことは難しいことも多いですが、それまでの関わりですら奪われてしまう現実と今私たちは向き合わざるを得ません。